

EDC 社会科高校用コース「人間的本性の探究」の内容構成

今 谷 順 重*

Nobushige IMATANI

The Structure of EXPLORING HUMAN NATURE :
A High School Course of EDC Social Studies Program

Abstract : EXPLORING HUMAN NATURE is a year-long high school course, and has developed by the Social Studies Program of the Education Development Center under grants by the National Science Foundation in U.S.A.. This course draws upon concepts, theories and recent data from the Biology, Psychology, Sociology and Anthropology to enable students to discover some of the essential characteristics of human behaviour. The purpose of this paper is to introduce the goals, assumptions and contents of EHN and to suggest some considerations for our educational practice.

I. はじめに

アメリカにおける教育内容現代化運動の中で、1960年代の初期に、ハーバード大学のブルーナーを中心としたスタッフによって、小学校5年用社会科カリキュラム『人間：学習のコース』（Man : A Course Of Study）が開発され、教育開発センター（Education Development Center）から発行された。そしてこのプロジェクトが、既成の社会諸科学の古い枠組にとらわれない学際的な観点から、社会科の中に積極的に現代の最新の学問的成果をとり入れ、「何が人間に人間性を与えているのか、どのようにして人間はこのような人間性をもった存在になってきたのか、どのようにすればさらに人間的になりうるのか」（⑨、109-110）という人間の普遍性の問題について、人間行動の深層を深く追求していくユニークな学習のコースとして注目されていらいすでに久しい。このカリキュラムのもつ新鮮で独自の社会探究の視点は、旧来の社会科のやや時代遅れがかった内容にもものたりなさを感じていた多くの現場教師に歓迎され、「アメリカの約5000の小学校で実践されたほか、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド等世界の多くの国々でも実験的に実施された」（⑩、52-53参照）。

さらにこのような実験授業の結果がカリキュラムの修正にフィードバックされ、内容や方法についての種々の改善が加えられる中で、現在では MACOS に対するさまざまな意見や評価もほぼでそろった観がある。そこでは、このカリキュラムのもつ新鮮な理念や方法に対する高い評価と同時に、これをとりあつかう教師の力量不足や子どもの認識能力についての見解の相異、社会科に対する既成のイメージとのずれから生じるいくつかの問題が、「残虐な場面が多すぎる、子どもがこのような高度に抽象化された社会諸科学の概念を理解するのは困難である、教師に専門科学への並はずれた深い理解がないと教材を使いこなせない、部分的な内容改善とはなりえても社会科のカリキュラム体系全体を再編成する理論にまではなりえない」（⑩、34-35参照）といった形で指摘されているのも事実である。

筆者も MACOS についてはこれまで何回かふれてきたが、このようないくつかの実際的な問題が存在する事実は認めながらも、生活経験主義の社会科にかわって社会諸科学の成果を内容構成の基盤とした新しい科学主義の社会科カリキュラムを確立していく上で、きわめて興味深く効果的な観点であるという最初の見解にいさかも変わるところはない。そして教育開発センターでは、その後もひきつづいて人類学、社会学、心理学、生物

* 島根大学教育学部社会科教育研究室

学、生態学等いわゆる行動科学の学際的な理念と方法を積極的に社会科学習の中に取り入れようとする一貫した立場から、『人間と技術』(People and Technology) 小学校中学年用、『臣民から市民へ』(From Subject to Citizen) 中学校用、『人間的本性の探究』(Exploring Human Nature) 高等学校用、『親になるための教育—子ども時代の探究』(Education For Parenthood—Exploring Childhood) 大学用といった新しいプロジェクトがつぎつぎと作成され、現在ではすべてのプロジェクトがほぼ完成している。ここでとりあげる高校用コース『人間的本性の探究』は、このような意味でいわばMACOSの高等学校版であり、人類学、社会学、心理学といった社会諸科学の領域の学問的成果と、自然科学の一領域である生物学の学問的成果とを人間の普遍の本性の理解という点において重ねあわせ、自然的社会的存在としての人間行動の2つの側面を統一的に理解させていこうとする点で、これまでの高校社会科の中にはみられなかったきわめて新しい試みである。

特にわが国では、昭和53年の学習指導要領の改訂によって高校1年に、現代社会の基本問題とそこにおける人間の生き方をとりあつかう教科として『現代社会』が新しく設けられたばかりであり、現在教育実践の場では、「人間の尊重と科学的な探究の精神に基づいて社会と人間に関する基本的な問題についての理解を深め、広い視野に立って現代社会に対する判断力の基礎と人間の生き方について自ら考える力を養う」(⑩、39)という新教科の目標を達成するための具体的な授業内容の構成について、さまざまな模索や試みがさかんにおこなわれている段階である。このような幅広い総合的視野に立って現代社会についての基礎的な考え方や学び方を習得させていこうとするこの新しい試みを、単なるかけごえだけの表面的な取り扱いにおわらせてしまわないようにするためにも、既成の教育実践の枠にとらわれない斬新で大胆な内容構成および学習方法の理論を導入していくことが不可欠であり、ここでとりあげる『人間的本性の探究』のコースは、その際のひとつの参考例としてきわめて有益な示唆を与えてくれるように思われる。以下では、① *Exploring Human Nature: An Overview of the Course and Goals and How to Assess Them*, Education Development Center, 1974 ② *Exploring Human Nature—Sources for Teachers*, George W. Goethals and the Staff of Exploring Human Nature, 1974 ③ *Exploring Human Nature: Workshops for Teachers—From Many Perspectives*, Education Development Center, 1974 の3つの基

本資料と単元1から単元4までの8冊の教科書および教師用指導書にもとづいて、コースの基本仮説と目標さらにそれを達成するための内容構成のあり方についてできるだけ忠実に紹介し、最後にわが国の教育実践への応用可能性といった観点から若干の考察を加えることにしたい。

II. コースの基本仮説と目標

1. 人間行動における普遍性の探究

『人間的本性の探究』(以下ではEHNと略称する)は、生物学と社会諸科学という2つの広範な学問領域から概念、理論、探究方法、最新資料をひきだしたクロス・ディシプリナリーな学習プログラムであり、生徒が人間についてのいくつかの本質的特徴を発見することによって、自分自身の行動の起源や原因を理解し、これまで無意識のうちにおこなっていた自分の行動や感情について新しい洞察をよびおこすとともに、自分と社会との関係、自分と他の文化の人々とのつながりについて広範で柔軟な感覚を発展させることを目的としている。(①、7参照)

コースの開発者の考えに強い影響を与えた Erik Erikson によれば、「詩人、小説家、歴史家、社会学者、人類学者、生物学者、これらすべての人々の仕事は人間の本性についての真実を明らかにすることにかかわっており、すべては同時にひとつの目標を追求している。あるものが良くてあるものが悪く、あるものが正しくて他のものが誤っているということはない。それぞれは異った観点から異った種類の探究をおこなっているだけである」(②、8)とされる。たとえば「空想物語や宗教、詩、音楽、絵画、舞踊、哲学といった芸術や人文科学は、悲しみや喜び、夢、善、悪といった人間存在の無限に深い意味を追求し、人間の情緒や関心の無限の多様性についてとりあつかうために貢献すべき洞察力を提供する」(②、52)。これに対して同じように人間行動をとりあつかっていても、特に集団の中での人々の相互関係と相互作用に興味をもっている社会学者の貢献は、芸術や人文科学の貢献とは明確に区別される独自の性格をもっている。つまり集団行動についての共通の関心の中で社会学者は、「人間の行為の大部分はそれ自身の意味をもった合理的で合目的なものである」(②、52)ことを仮定している。さもなければ社会秩序は存在しえないからである。そしてさらに彼らは、「このような社会秩序は基本的に自然的秩序の法則性や規則性と同質のものであり、すべての自然と同様、学問的な方法によって観察さ

理解されうる」(②, 52) ことを仮定している。したがって社会学者は、すべての自然科学者と同様、たとえそれが抽象的で静的なものになって人間行動のもつ微妙なニュアンスが失なわれるとしても、人間行動について蓄積された資料を一般化することによってそこに存在する普遍的法則性を見つけたことを価値あることだと信じている。このように本コースでは、人間のあらゆる知的追求の営みはすべて人間の本性を明らかにしようとする共通した目標をもっており、なかでも自然科学と社会科学の探究は、それをより合理的分析的な方法によって達成しようとする点に大きな特色と共通性があるという基本認識に立ち、人間行動に対する科学的探究と人間の本性の合理的客観的理解について、つぎのような仮説を設定している。

1. 人間行動は、観察や実験、研究によって識別される秩序正しいパターンに従っている。
2. これらの秩序正しいパターンは、われわれが人間行動の研究に最も一般的な意味での科学的方法を適用することによって認識され理解される。
3. 人間行動についての普遍的法則性は、異った学問領域からの理論や概念、方法を結びつけることによって最もよく理解される。したがってEHNは人間行動の興味深く重要な側面の探究において生物学、人類学、社会学、心理学といった領域からの異った洞察を結びつけようとしている。
4. 人間行動についての比較的アプローチは、ある時は動物行動との比較、ある時は異った文化との比較によって、生徒自身の行動や文化についての理解を増大させ、人間の普遍性と多様性に対する深い認識と大きな感受性を発展させることをたすける」(①, 7)

つまりここでの目標は、人間行動の普遍性を生物学的傾向性と文化的社会的傾向性の相互作用過程として科学的に解明していくことであるといえよう。そしてそのための主な学習内容を、後で詳しく述べる生物学の他に、「いかにして人間は世界を認識し、物事に対処し、個人の特性や人格を形成するか」(②, 9)を究明する心理学、またこのように心理学が個人の行為やその動機に焦点をおくものに対して、「水素と酸素が結合すると新しい何かができるように人々が集まると何か新しいことが生じる。彼らの行動はAとBの行動の単純な結合ではない。それは個人的なパーソナリティだけからでは予測することのできない複雑な社会的相互作用である」(②, 9)という立場から集団的な人間行動をとりあつかう社

会学、そして、「自給自足的で単純な社会の政治的、経済的、宗教的といったすべての社会的構成要素の全体的な相互関係を見ることによって、何がすべての社会に共通の構造であるかに関心をもつ」(②, 10)人類学からひきだしている。これらの学問領域のひとつの顕著な類似性は、それぞれが人間行動の異った側面を強調しているとはいうものの、すべてが実験的な証拠の収集による人間の本性の究明に重大な関心をもっているということである。

2. 生物学と社会諸科学の統合的アプローチ

人文科学、社会諸科学の中でのインターディシプリナリーな研究とは対照的に、本コースで試みられている生物学と社会諸科学の見通しの統合はたった今はじまったばかりである。たとえば、歴史学と文学は異った資料と異った方法論をもつ明確に区別された学問領域でありながら、伝統的にそれらは互いにおきないあいたすけあう探究の流れであるとみなされてきた。それに対して、EHNに含まれている生物学と社会諸科学の2つの主な学問領域は、伝統的にそれぞれ異った疑問をもち異った理論を応用し異ったタイプの資料にもとづいて推論すると考えられてきた結果、これまでは独立し重なりあうことのないそしてさらには互いに完全に無関係な領域とさえみなされてきた。(②, 13参照)

しかしEHNでは、伝統的に全く区別されてきたこれら2つの学問領域を結びつけ重ねあわせるというユニークなテーマが設定されている。なぜなら、最近、「両方の領域の研究者たちは、人間行動の研究における最も重要な問題の多くは、ひとつの学問領域だけでは十分にとりあつかうことができないことに気づいてきており、このようなインターディシプリナリーな研究の成功は、生物学と社会諸科学の古い区画主義に固執すべき理由は何もないことを示している」(②, 13)からである。したがってEHNのコースは、高校の生徒に、伝統的に専門的なレベルでおこなわれている独断的な古い学問領域の区別ではなく、それにこだわらない全く新しい観点からの探究の長所と興味深さを教えることを大きなねらいとしている。たとえば、単元1「人間行動の起源」で学習される進化論的な見通しは、人間はすべての人々の生活を規定している生物的本性である自然淘汰という観点から、自然界の一部としてながめられたときにはじめて十分に理解することができることに気づかせる。また同じ単元1では、人間行動の特色をより深く理解するために動物の行動との比較学習が設定されている。もちろん人間

は非常に特殊な動物であり、われわれの多くの本性はユニークである。そしてこのユニークさを強調することによって他の動物についての研究はわれわれ自身について理解するさいの何の手助けにもならないと主張する人もいるが、これはあやまりである。(②, 70参照) このような考えとは反対にここでは、「人間は他の動物とどのように共通しているか、それはなぜかを理解することによって、われわれは人間のユニークな特性をより明確に認識し包括することができる」(②, 70)という前提にたつて、他の動物との比較学習の利点についてつぎのようなことが指摘されている。

まず第1に動物の行動との比較は、「複雑な文化的社会的要因によって今日ではすでに不鮮明になってしまっているいくつかの基本的な人間行動の意義と機能を生徒たちに再発見させることを可能にする」(②, 70)ということである。たとえば、保育施設の完備や医療技術の進歩、病気の予防といった文化的要因による乳幼児の死亡率の低下は、赤ん坊の生命維持や養育とそれらに対する母親の基本的責任との関係を見失なわせがちであるが、野外の母ざると子ざらの行動についての観察は、生徒が人間における母と子の結びつきの本来的な姿とその意義を理解する機会を著しく増大させることができる。つまり動物の類似的な行動を学習することによって、われわれは人間としての自分自身の行動の原初的な形態とその意義をあらためて問い直すことができるわけである。(②, 70-71参照)

第2に他の動物についての学習は、「われわれがそれを当然のことと信じて分析しようとさえもしない行動パターンの重要性を指摘し、あらためてそれを深く追求してみようとする意欲や興味を喚起することができる」(②, 71)。たとえば遊びはその良い例であり、それは他の動物にも存在しており生活の中で効果的な機能を果しているのを見ることによって、人間にとっての遊びの重要性や人間はそれを文化的に高度な形でつくりだしていることを興味深く理解することができる。

第3に他の動物についての学習は、われわれが、「人間行動の種々の特性のうちどれが他の動物と共有する普遍性であり、どれが人間のみがもちうる大きな頭脳と言語と学習能力による特殊性であるかを明確にみわけることを可能にする」(②, 71)。たとえば、いかにして他の動物が意志伝達するかを観察することによって、われわれは、「情緒を表現したり危険を警告したりする能力はすべての社会的動物に共通なことであるが、それをさらに細かく具体的に言葉によって記号化する能力は、人間

だけがもちうるきわめて特殊な行動である」(②, 71)ことを学ぶことができるわけである。

第4に他の動物についての学習は、「われわれ人間のみがもちうる特殊な能力や行動がどれくらい古くからそなわっていたか、そのおおよその年代を評価するのを助けることができる」(②, 71)。たとえば男どうしの競争は性的に再生産される他のすべての動物にもみられ、したがってこれは非常に古くからわれわれの祖先を特色づけてきた行動であるということができのに対して、夢をみること(REM sleep)は、すべての哺乳動物にはみられるが、鳥類や虫類にはみられない。したがってそれは、男どうしの競争ほど古くはないがやはりかなり古い行動であるということが出来る。また生まれてから数年間にわたる母と子の強い結びつきといった行動は霊長類にのみみられる特性であり、これは進化の中で比較的最近われわれの祖先が獲得した能力であるということが出来る。また道具の作製と使用は他の動物ではチンパンジーにだけみることが出来るという点で、これはごく最近人間が獲得した能力であるということが出来るわけである。またこれらの他にも、他の動物について実験室の実験で得られた知識は、倫理的な理由で実験をおこなうことのできない人間行動について予測し推論するための貴重な手がかりになりうる。(②, 71-72参照)

つまり心理学者、社会学者、人類学者が、個人の文化的社会的な生活においてどのような特殊な要因が人間の行動に影響を与えるかを追求するのに対して、生物学者は、われわれの種の歴史においてどのような普遍的要因がすべての人間の行動を共通に規定してきたかを明らかにするといえよう。このように、「人間行動についての心理学、社会学、人類学の成果の上にさらに生物学の成果を重ねあわせることによって、人間生活における生物的、心理的、文化的、社会的諸要因間の相互関係を統一的に把握し、人間の行動を生物的欲求や衝動と文化的社会的条件の相互補完作用として同一の視野に位置づける中で、これまでの個別的な学問領域からだけでは生じえなかった、人間行動についての新鮮で総合的かつ完全に自足的な説明体系を生徒の中に発展させていこうとする」(①, 7-8参照)ところに、本コースの大きな特色があるということが出来る。

3. 行動科学の学問的方法論の習得

このコースの主な目標のひとつは、生徒が行動科学の探究方法について基礎的な理解を獲得することである。そのために生徒は様々な場面で、観察、実験、インタビ

ュー、資料としての写真や自然映画の分析、記録の解釈、統計の読み取りなど、生物学者や社会学者のとする手順と同じ調査過程に意欲的に参加し、行動科学の最前線で科学者が提起し調査している問題や理論について、それを一方的に受け入れるのではなく自分自身の手で批判的に検証し確かめてみるのが要求される。行動科学の主な目標は、人間行動の動機や目標を追求したり、その目標達成過程に生じる傾向性や法則性を発見することによって、特殊な人間活動がもたらす影響や結果を予測するために表層的な現象の背後を深く探ることである。

(①, 2参照)そしてその際の科学的な探究方法の基礎として、「動物や人間の行動を的確に観察する技能、観察によって獲得された事実を整理し解釈しそれにもとづいて検証されるべき仮説を設定するとともに、さらに新しい追加資料によってそれをより厳密で高度な理論へと発展させていくことのできる能力」(②, 11)が特に強く要求される。したがって生徒に習得させるべき科学的方法の性格について本コースでは、つぎのような点が強調されている。

まず的確な観察の重要性については、19世紀のおわりまで人間や社会についての研究は自由な思索や観念的な理論が中心であったのに対して、行動科学では「実験的な資料や経験的な証拠がすべての科学的調査の指標であり出発点である」(②, 9)という立場から、実験的な証拠の収集に重大な関心が払われている。つまり科学とは注意深く高度に操作された観察からはじまるといってもよい探究活動である。したがって生徒は、価値あるすぐれた観察をおこなうことのできる技術と能力を身につけなければならないが、効果的な観察者になるための条件として、観察者は、観察の厳密性を確保すると同時に他のだれによってもくりかえし使用することのできる客観的な資料を提供するという、すべての科学的試みの第一義的な前提を満たすことが強く求められる。(②, 11参照)そしてそのためには、「何を見たかということばかりではなく、いかに観察がおこなわれたかについても明確な説明をおこなう責任を負っている」(②, 11)ことが強調されている。

つぎに、推論による仮説の設定とその検証過程の重要性としてはつぎのような点が指摘されている。つまり、「対象としての複雑な事物が単純化されその本質が明らかになってくるのは、推論が、観察された種々の事実を関連づけはじめるとき」(②, 11)である。たとえば観察は、「母親と幼児がいかに相互作用するかに注目し、子どもが泣いたとき母親がそれをだきあげあやすという事実を明らかにすることはできるかもしれないが、その背

後でこの2つの行動を結びつけている子どもの欲求とそれを満たしてやりたい母親の母性愛を直接観察によって明らかにすることはできない」(②, 11)。われわれはこれらを観察によって得られる資料から推論しなければならぬのである。そしてこのようにしていったん推論による仮説がたてられると、それはたとえ真実でないかもしれないにしてもそれを検証するために必要な具体的方法や資料を示唆することによって、探究を案内し方向づけることを可能にする。その結果、母親と子どもの複雑な相互行為の背後にある意義や目的、傾向性や法則性がつきつきと明らかになってくるわけである。(②, 10-11参照)つまり積極的に推論していかなければ、それが正しいか誤りであるかはもちろんのこと事象の本質について推論以外のことも何も見えてこないのであり、「科学的な認識を発展させるためには、何らかの予想をもって対象に目的意識的に働きかけその予想の正否を実物にあたって確かめるという手順をふむことが不可欠」(②, 18参照)である。先に述べた観察もこのように仮説として提示された理論的前提を実証したり排斥したりするためにおこなう確認の行為にほかならないことに気づくべきであろう。

このような考えにもとづいて、EHNのもつ最大の教育的挑戦は、「生徒がオープンエンディッド・クwestionsと共に生活し、探究過程それ自体を尊重し、人間行動についての単純な説明に対する健全な懐疑心を保持するようになる知的冒険に参加することを助けること」(①, 1-2)であるとされている。と同時に、科学的知識体系は個人的な主観や偏見とは明確に区別され、他の人々によっても承認され共有されなければならない社会的性格をもつものであるがゆえに、それを追求していく探究活動も単に生徒個人の人合理的思考によるだけでなく、生徒と生徒、教師と生徒の協力や援助による集団的活動を通してより効果的に発展させられる傾向があり、このような意味で探究過程を社会的な活動として組織することにも十分な配慮がなされている。

4. 資料としての映画と共同体

EHNでは野外観察や実験室での実験をおこなうかわりに、人間行動のパターンと動物の行動との関連性を追求し、人間社会の多様性と普遍性を理解するための教材を大きく映画に依存している。したがって本コースで用意されている15分から30分の長さの14の映画は、学習の脈絡に応じてできるだけ多様な方法で使用できるよう作成の観点や手法に工夫が加えられている。たとえば、野性のチンパンジーの行動についての映画は、生徒がその

他の方法では入手することができない豊富な視覚的資料を提供するためにできるだけ写実的な手法で作成されている。それは書かれた説明よりもはるかにすぐれた確実性と具体性をもっており、人間行動と比較するために使用されるチンパンジー親子の細かな愛情のしぐさについて深い理解を提供することができる。また Rock-a-bye Baby は、多くの文化での母親と幼児の行動と他の動物の母親と子の行動を視覚的にしかも短時間で順次的に並置することができるよう、人間と動物の親子についての比較的アプローチを採用している。The Manhunters は、化石や遺跡について考古学者がそれを分析する方法にしたがって、遺物から読みとれる当時の生活の姿を具体的に究明していく中で考古学の学問的方法を細かく紹介する。(①, 22-26参照)そして教材としての映画のもつ長所としては、「まず第1に、能力のすぐれた生徒だけでなく理解が遅く能力の低い生徒も、映画を見ることそしてそれを何回も見直すことによって自己の探究力をフルに発揮することができる。第2に、映画は他の環境に住んでいる人々の行動、感情、思考を共感的に理解させる最大の近道であり、それは対象を文字通り生徒に身近な存在としてとらえさせることができる。第3に、同じ映画についてそれぞれの生徒が個人的に見たり聞いたりすることのちがいは、さらに詳しく注意深く見たり考えたりすることの必要性を生じさせ、教室での討議を一層活発で効果的なものにするができる」(①, 23)といったことがあげられている。

またEHNの4つの単元では、地域共同体の人々や素材をうまく活用する学習活動が数多く設定されている。それは眠っている赤ん坊の観察から、8~10才の子どもに彼らの行動についてインタビューすること、地域の博物館や動物園、文書保存館の訪問、地域の専門家を教室にまねいて話をしてもらうことまで広範にわたっている。ここでは共同体は単なる地理的な実体としてではなく、人間その他諸々の社会的歴史的資料の総体としてとらえられており、子どもたちは学習の場を積極的に教室の外に拡大するよう進められるわけである。さらに、校長や事務員、給食係のおばさんといった学校の他の職員もよるこんでインタビューや討議に参加する場面も数多く設けられている。(①, 27-30参照)

5. コースの目標

このような基本仮説をふまえて、コースの学習目標は「認知的発達、コースの科学的方法にともなったある種の探究技能の習得、社会的個人的発達」(①, 36)とい

う3つのカテゴリーから構成されている。認知的発達では、生徒が自然淘汰、進化的発達、社会化、発展的生活周期、役割、社会階層といった生物学や社会諸科学の概念を理解できるようになることが強調されている。また合理的な探究についての科学的技能としては、疑問を提起しそれに答えようとする、結論に到達するために証拠を使用すること、個人的な観察・映画・討論・視覚的イメージ図といった資料の確かさを評価し分析し熟考することなどが強調されている。さらに社会的発達については、小集団学習の相互作用の中で学習過程を集団構成員に共通した協力的経験活動として組織することができるようになること、他の人の見解を理解し尊重するといった社会的態度を身につけるようになること、また個人的発達については、生徒がいくつかの観点から他の人の行動を深く考えること、家族構成員の中での自分の位置と役割について理解すること、自分自身の行動について深い洞察を加えるようになること、人々のちがいについてより敏感になり他の文化についての理解を広めることなどが強調されている。(①, 36参照)

そしてさらにこのようなコースの一般目標は、つぎのようなより具体的な到達目標へと細分化されている。

- 「1. 生徒は、人間行動は生物的、自然環境的、個人的、社会的といった多くの要因の相互作用の結果であることを学習する。個人の行動についての十分な理解は、少なくとも4つの明確なしかも相補的な見通し、即ち種の構成員としての人間、社会的網目の構成員としての人間、生活周期を通して発展するものとしての人間、社会的制度の内でも機能しているものとしての人間を含んでいなければならない。
2. 生徒は、彼自身の行動および他人の行動をよりよく理解することができるようになる。生徒は彼自身の個人的な成長と発達の底に横たわっている先天的普遍的なパターンと後天的個別的相異を認識することによって、他の人と協調することを学ぶようになる。
3. 生徒は、比較文化的および比較種族的対照を使用することによって、自分自身の社会および他の社会についての広範な知識を獲得し、そこに存在する類似性(普遍性)と相異性(文化的多様性)を究明する。
4. 生徒は、人間行動は科学的に探究しうる対象であるという観念を習得する。
5. 生徒は、探究的アプローチつまり科学的方法や論

理的推論の技能についての基本的な理解を習得し拡大する。このアプローチは、自然科学、人類学、社会学、心理学の科学的方法を含んでおり、資料は動物の行動、生徒の個人的経験、生徒自身の共同体、生徒によって収集された情報から、比較種族のおよび比較文化的方法によってひきだされている。

6. 生徒は仮説を設定し、それらを適切な資料で検証することによって、種々の学問領域からの理論を現実に応用し批判的に評価しながら習得することを学ぶ。
7. 生徒は価値的な疑問を説明し、人間行動の重要な決定要因としての価値を認識することを可能にする概念的枠組の使用を習得する。
8. 生徒は協力的な学級の冒険に参加し、知識や社会的技能を拡大するための情報交換や相互作用に加わることによって、学習を相互援助の共有的経験としてとらえるようになる」(①, 37-38)

III. コースの内容構成

表1に示すように、コースの4つの単元である1人間行動の起源、2子ども時代と共同体、3来たるべき年代一変化への対応、4社会の中の個人は、乳幼児期、子ども時代、大人への移行期としての青年期、完全な成人としての大人期という人間の生活周期の4つの主な段階について順次的に学習していくことによって、人間の普遍性と文化的多様性の間の相互作用を明らかにしながら、同時にそれをふまえて一人の人間として将来の社会生活をどのように築いていけばよいかについて、それぞれの生徒に自分なりの見通しを切り開かせるというテーマで結ばれている。つぎに、それぞれの単元の内容構成について教科書および教師用指導書をもとにみていくことにしたい。

1. 単元1「人間行動の起源」

ここでは主に、自然界の一部分として存在している人間の生物的本性が、自然環境と人間との関係、地球上に住んでいる他の種(Species)と人間との関係といった観点からとりあつかわれる。単元はさらに、①顔の表情一怒りと恐怖・睡眠と夢、②進化と人間行動の歴史、③人間の家族の進化といった3つのトピックに分かれており、学習はまず、毎日のわれわれのごくありふれた無意識的行動である顔の表情について詳しく観察することからはじまる。生徒は動物や人間の非常に複雑な顔の表情

をいくつかの異った構成要素に分解するなかで、どのようにしてわれわれは顔の表情を読みとることができるか、なぜわれわれは顔の表情によって感情を表現するか、顔の表情にみられる普遍的な性格は何か、どの程度までわれわれは顔の表情を自分の意志でコントロールすることができるか、といったことについて追求する。また怒りと恐怖、睡眠と夢については、ある人が怒ったり恐れたりしているのをわれわれはどのようにして読みとることができるか、怒りや恐怖に対してわれわれの体はどのように反応するか、眠りとは何か、もしわれわれが眠らなかつたらどうなるか、われわれはなぜ夢を見る必要があるか、睡眠と夢はどのような対応関係にあるかについて追求する。そしてその結果生徒は、無意識のうちにおこなっているこれらの人間行動は、個人の意志や多様性をこえた生物的普遍性によって強く規定されていることに気づき、われわれは文化的社会的存在である前にきわめてすぐれて生物的存在であることを発見するようになる。(①, 9参照)

つぎに学習は、このような1個の生物としての人間の行動が長い歴史の中でどのように進化してきたかという自然淘汰の理論へと移っていく。『自然淘汰の実験』というシミュレーションゲームが、生徒自身がその過程の中にくみこまれており現在もおダイナミックに進行中である自然淘汰についてつぎの2つの側面の理解を提供する。すなわち「①自然淘汰の圧力は個人(個体)の連続的再生産の中で少しずつ相異をうみだし、連続的な世代によって所有される肉体的行動的な特性を徐々に変化させていく。②自然淘汰の圧力の方向は環境によって強く規定される」(⑤, 10)。つぎに生徒は、自然淘汰の理論を人間の祖先の化石の記録に適用し、科学者が骨や道具といった間接的な資料にもとづいて人間行動の変化をどのように推論していくかを学習する。その結果彼らは、「①ホモサピエンスはひとつの種でありすべての人類はこの種に属している。②この種は長い期間を通して特別な環境に適するように進化してきた。③人間のある種の社会的心理的そして生物的特性は、進化の歴史の中で自然淘汰の過程を通してつくられたものである」(⑥, 10)ことを理解できるようになる。そして生徒は単元の最後のトピックで、このような人間の進化や自然淘汰についての理解をふまえて、母親と幼児の結びつき、父親と子どもの結びつき、男性と女性の結びつきといった3つの普遍的な動物および人間の行動パターンを分析する。つまり、これら3つの行動パターンを体系的な形で同時に含んでいる動物や人間の家族について総合的に説

＜表1＞ 人間の本性の探究 (Exploring Human Nature) の内容構成

		組織的な発問	中心的な理論的道具と概念	調査のための主な方法
1. 人間行動の起源	幼児期	<ul style="list-style-type: none"> ○われわれの生物的本性はわれわれの行動にどのような影響を与えているか。 • われわれは自分自身の行動をどの程度までコントロールしたり影響を与えたりすることができるか。 • どのようにして人間の行動は進化してきたか。 • 遺伝は人間の行動にどのような影響を与えるか。 • なぜすべての場所の人々は家族の中で生活するのか。 • 人間の乳幼児期は人間の本性について何を示しているか。 	<u>自然淘汰理論</u> 自然淘汰による進化 社会的結合 人種	<u>種族横断的比較</u> 実験室の実験 自然科学的な観察と記録 考古学的な調査
2. 子ども時代と共同体	子ども期	<ul style="list-style-type: none"> ○文化は人間の生活にどのような多様性をつくりだすか。 • もしあらゆる場所の人間がある同じ目的を達成するための行動をすれば、異った社会の大人はどれだけ多様な方法でそれをおこなうか。 • なぜ異った文化の家族は異った形態をとるのだろうか。 • なぜ異った共同体の両親は彼らの子どもに対して異った価値や期待をもつのか。 • 両親の価値や期待は君が子どもとして学ぶことにどのような影響を与えるか。 • どのような社会的構成要素がある共同体の大人がある特定の行動パターンを尊重することを決定するか。 • 子ども時代の経験は大人としての君の生活にどのような影響を与えるか。 	<u>社会体系のモデル</u> 社会化 価値と期待 社会的組織 文化	<u>文化横断的比較</u> 観察と記録 インタビュー 質問用紙による調査
3. 来たるべき年代への対応	青年期	<ul style="list-style-type: none"> ○大人になる経験はどのようなことを含んでいますか。 • いつ大人の世代に到達するかについて君はどのようなことを知っているか。 • 異ったそれぞれの文化の中で青年期の肉体的、情緒的、社会的な生活はどのように定義されているか。 • アメリカにおいて思春期がはじまるときや変化の速度はどのように異っており、それが個人の行為や感情にどのような影響を与えているか。 • 青年期はわれわれにとってどのような意義をもっているか。 	<u>成長の理論</u> (たとえばエリクソンの理論、サリバン、ミードの理論) 移行：あらかじめきめられた移行と自分自身で構成する移行 主体性 親密性	<u>文化横断的比較</u> <u>個人的なケーススタディの分析</u> 小グループでの討議 インタビュー
4. 個人と社会	大人期	<ul style="list-style-type: none"> ○大人は社会制度の中でどのような役割を果しているか。 • 大人はいかにして社会の中で特別な役割につくか。 • アメリカ合衆国の大人は彼らの果す職業的役割についてどれだけ多くの選択の機会をもっているか。 • 社会の中に分布している大人の役割や責任と報酬配分の体系とはどのようなものか。 • われわれは社会の中での自分の職業的役割が変わることを望むか。われわれはそれをいかにして変えることができるか。 • これまでに学習した人間の本性についての理解をふまえてわれわれはどのような新しい共同体を設計できるか。 	役割 地位 階層 職業の多様性 動機と達成 社会的可動性	<u>社会的分析</u> <u>統計的分析</u> <u>実地調査</u> インタビュー (③, 21参照)

明する中で、生徒は自然淘汰の理論から得られた新しい知識や技能を具体的な人間行動の場面に適用することを求められるわけである。(①, 10参照) その結果、これらの学習を通して生徒はつぎのような目標を達成することが期待されている。

1. 生徒は、人間行動についての生物的遺伝的基礎についての理解を身につけ、ある種の人間行動の機能を理解し説明するために自然淘汰の理論を使用することを学ぶ。
2. 生徒は、自然環境に対する独特の生物的適応能力をもった種の構成員としての彼自身について自己認識を得るとともに、化石の記録から推論される人間行動の歴史についての知識を獲得する。
3. 生徒は、人種の本性についての探究の中で、他の動物の種からの資料を使用する Cross-Species Comparison の有効性を評価することを学ぶ。
4. 生徒は、簡単な実験の中での仮説の検証のさいに科学的方法についての彼らの理解を応用することができる。
5. 生徒は、たとえば社会的であると同時に生物的でもあるものとしての人間の家族の機能を考察するといった社会科学的問題を探究するために、生物学からの知識についての新しい資料を応用することができる。
6. 生徒は、普遍的な人間行動の生物学的生理学的基礎についての学習をおこなった結果、彼ら自身の多くの行動についての理解を増大させる。たとえば彼らは、睡眠と夢、顔の表情による意志の伝達、怒りや恐怖の表現、人間の男性と女性・母と子ども・父と子どもを結びつけるしくみから生じる欲求の伝達についての生物学的基礎に関する知識を獲得するであろう」(①, 38-39)

2. 単元2「子ども時代と共同体」

単元2はさらに、①大人の期待と子どもの行動、②共同体の構造—それは子どもの経験にどのような影響を与えるか、③大人の世界への準備、④変化しつつある共同体での子ども時代の4つのトピックにわかれており、ここでは視点を人間行動の生物的普遍性から異った文化における人間行動の多様性へと転じ、この多様性が子どもの社会化にどのような影響を与えるかについて言及している。つまりこの単元をつらぬく問いは、「異った共同体において大人が尊重するある種の行動パターンを決定するものは何か、それは共同体のどのような構成要素から成っているか、そしてそれは子どもの社会化にどのよ

うな影響を与えるか」(⑥, 1-2)ということである。そしてこれらの問いの根底には、「すべての社会における思考方法、社会的相互作用の方法および生活様式は予測可能な秩序正しい体系的パターンに従っており、したがって人間の行動や社会構造は無秩序に生じているのではなく、ひとつの特別な共同体における他の特徴との結びつきの中で因果関連的に説明し予測することができる」(④, 3)という社会的全体観を基礎とした文化人類学的観点が横たわっている。

共同体の行動パターンを構成する要素としてこの単元で明らかにされているのは、「自然的背景、生活様式、家庭内の条件、共同体の綱目、大人の毎日の仕事、子どもの活動、つぎの世代に対する価値や期待」(⑥, 26)という7つの変数である。具体的には、生徒はこれらの変数について調査するために大規模な比較文化学習をおこなう。彼らはインタビューや観察によって彼ら自身の共同体における子ども時代についての情報を収集するだけでなく、つぎの5つのひじょうに異った共同体についてもさまざまな視聴覚器機の助けをかりながら、野外調査の人類学者と同様に、資料をあつめ分析するためにインタビューや観察をおこなう。

- ・ネパールとチベットの国境の村シンブーク
- ・メキシコのバリオ族の共同体
- ・カラハリ砂漠のカング族の共同体
- ・ケニアのキクウ族の共同体
- ・イスラエスのキブツ

生徒はそれぞれのケースについて7つの変数の相互関係を明らかにするよう求められ、カード分類によるチェックリストを作成するなかで、共同体の構成要素間の関連性を強調するそれぞれの社会組織モデルをつくりあげていく。このモデルは、ひとつの文化の諸部分の相互関連性を強調していることが求められる。さらに生徒はこれらの社会モデルが子どもたちの生活にどのような影響を与えるかについて、特にその社会の中で子どもが与えられる仕事の影響という観点からいくつかの仮説をうちたてるよう求められる。情報が蓄積され整理される中でそれぞれの共同体における行動パターンが明らかになってくるにつれて、生徒はつぎの2つの重要な観念を認識することができるようになる。つまり、「①一見奇異に感じられる習慣や行為も、それらが生じている社会的自然的脈絡の中にくみこまれることによってはじめて意味なものとなりその重要性を理解することができる。②それぞれの文化における見慣れない習慣や行動の起源は、それが生じている共同体の社会的自然的構成要素を理解すれば見つけたことができる」(⑥, 29-30)。

生徒はまた、ひとつの社会のある側面の変化すなわち経済的、社会的、技術的变化がいかにか子ども時代の経験に影響を与えるかについても探究する。ロールプレイによって彼らは、大人の役割が急激に変化しておりこれまでと異った生活様式の選択に直面している社会では、世代間の葛藤が激しいことを体験的に学習していく。(①, 11-12・⑥, 25-30参照)このような世界の異った文化における子ども期の比較学習を通して、生徒が習得することを期待されている事項はつぎのようなものである。

- 「1. 生徒は、人間行動はそれが生じる社会的脈絡によって影響されること、つまり共同体の社会組織は子どもの社会化に含まれている子どもの養育と、その共同体の子どもにあらわれる行動の特性に体系的な方法で影響を与えることを理解する。
2. 生徒は、彼ら自身の共同体について分析することを可能にする概念的枠組を習得し使用するようになる。生徒は、すべての共同体に含まれている主な社会的構成要素を明らかにし、それら相互の結びつきについての理解を獲得する。さらに生徒は、社会のひとつの側面の変化が他の側面にどのような影響を与えるかを体系的に評価することができるようになる。
3. 生徒は、異った文化における子どもの経験の多様性(小さな子どもに要求される仕事上の責任の程度、学習の異った方法や形態)と同様、子ども時代の普遍的側面(大人への依存、成長・発達のための学習の意義と機能)について理解する。
4. 生徒は、それぞれの社会的行動はそれら独自の社会的文化的脈絡の中ではじめて意味をなすことについての理解を獲得する。
5. 生徒は、社会科学モデルの特性について学び、それを彼らが学習している問題に適用することによって科学的方法についての彼らの理解をさらに促進する。そして生徒は、資料を組織化し範疇化し要約するさいのモデルの有効性について、社会的行動についてのモデルは典型的な行動しか説明できず必ずしも個人の特異な行動を予測することができるとはかぎらないといったように、その有効性について批判的に評価することができるようになる。
6. 生徒は、子どもの具体的な社会行動の起源について仮説を設定し、それを彼ら自身や他の共同体からの新しい資料によって検証するとともに、彼ら自身の理想的な子ども時代の世界を設計することができるようになる。

7. 生徒は、子どもの行動に対する両親の価値や期待の影響について調べ、これらの価値や期待は共同体の大人の中で共有された世界観から生じることを理解する」(①, 39-40)

3. 単元3「来たるべき年代—変化への対応」

この単元は、①青年期への見通し、②肉体的成熟の変化、③愛と忠誠の変化、④大人の地位への移行という4つのトピックから成っており、生徒は人間の生活周期の第3段階である青年期つまり子どもから大人への移行期にアメリカの青少年が共通に経験するつぎの3つの大きな変化について学習する。

「肉体的成熟への移行—思春期の肉体的変化とそこから派生する情緒的变化

愛と忠誠における移行—両親から家族の外の人々への情緒的な結びつきの移動、特に異性に対する考え方の変化

大人の社会的地位への移行—子どもから大人の地位や役割への移行、それは種々の文化によって異っておりまた異った文化パターンが個人の経験にいかに影響を与えるかによって異っている」(①, 12-13)

アメリカでは、これらの変化は青年期とよばれる生活段階といっしょにおとずれるので、学習の内容は高校生が毎日の生活で直面している中心的な経験であり、自分自身や家族、友達、学校、社会と彼らの関係に大きな影響を与えている日常的出来事そのものである。しかしこれらの変化がいつ生じるか、それがどれだけ長くつづくか、変化の経験がどれだけ個人に影響を及ぼすかは個人によって差があり、異った文化や社会ではさらに大きな違いがある。(⑦, 14参照)したがって単元の中心的な関心は、「思春期における未成熟から成熟への肉体的変化、興味関心の対象が家族から異性へと移行する情緒的变化、子どもから大人の地位への社会的変化が、われわれの文化や他の社会においてどのようにパターン化され、いかにそれらが個人の行為や感情に影響を与えているかについてその普遍性と多様性を考察していくこと」(⑦, 14)であり、そのなかで生徒が自分自身の生活を見直し広い視野と深い洞察をもってこの変化のりをこえていくことを助けるとともに、同世代の他の人々の感情や行為についての理解を増大させることである。

3つの移行のうち最初のしかも最も具体的なものである思春期における肉体的変化をとりあつかったトピックでは、生徒は男性と女性のホルモンや体つきの変化、そ

の変化の時期や速度の個人的多様性といった生理学的側面について学習する。肉体的移行についての説明は、「いかに思春期が成熟しつつある自分自身や同輩・両親を見る方法に影響を与えるかについての類似と相異を示すことによって、自分自身の変化に確信をもてず不安定な混乱状態の中で自分の姿を見失ないがちな生徒に、彼らの直面している状況は一方ではあらゆる人間に共通にみられる普遍的な性格のものであり、他方では個人によって差の大きい不統一な過程であること」(⑦, 16参照)を強調する。生徒は他の文化や共同体について学習し、自分や他の個人が考え感じ行動する方法について深く考えるようになるにつれて、彼らがほとんど親しみを感じていない他の経験をもった人々や他の社会の人々と共有している行動パターンを認識しはじめるようになる。そしてこの認識は、「自分だけが一人であり孤独で孤立していると感じたり考えたりする傾向のあるこの時期の生徒に、『君たちは孤独ではない』ことを教える」(①, 8)うえできわめて効果的な役割を果たすことができる。

情緒的变化のトピックであつかわれる第2の移行は、両親に対するものから同輩や異性に対するものへと愛情や忠誠の対象の移行である。心理学の理論や文学、ケーススタディ、生徒自身や世界の他の共同体からの資料について文化横断的な比較を使用しながら、生徒はいかに個人がこの時期の情緒的な生活の変化に対処していけばよいか、そしてわれわれ自身の社会や他の社会がどのようにこの過程を促進し援助しているかについて考察する。このような学習を通して生徒は、「若い人々が不可避免的にくわす嵐と抑圧の時代、矛盾や混乱にみちた反抗期が人間形成に果たす役割について客観的に理解していくことができる」(⑦, 19参照)わけである。

大人の地位への移行のトピックでは、思春期においてすべての個人が経験する第3の変化である子どもから大人への社会的地位の移行についてとりあつかわれる。子どもが大人の地位を完全に獲得するまでのこの変化は、子どもと大人との間の相互作用的な過程である。子どもが大人の地位を獲得するためには、彼らが子どもから大人へと変化したことを大人が認識しそれに同意しなければならない。大人の地位を獲得するための具体的な方法は異った共同体によって多様であり、未開な社会では特別な儀式が大人の地位への明確な移行を承認する。これとは対照的に多くのアメリカの共同体では、このような明確な手順は存在していない。むしろ若者たちは、彼らが大人らしく行動することができるようになったことを自ら示すことによって徐々にみとめられていく。ある場合には若者たちがいかに行爲すべきかについて明確な規

則が存在することもあるが、ほとんどの場合には基準が漠然としたり対立していたりして、若者が自分で行動のルールをつくっていかなければならない。(⑦, 14参照)生徒は子ども期から大人期への移行の文化的パターンやそのようなパターンが個人の経験にどのような影響を与えるかを考察する。そして生物学、社会学、心理学、人類学の資料や方法・概念を適用しながらこれら3つの普遍的な変化を調べるなかで、つぎのような目標を達成することが期待されている。

- 「1. 生徒は、青年期への移行期間の人間行動は、生物学的、社会的、個人的な要因の相互作用の結果であり、青年期への移行の生物学的普遍性は、異った社会や共同体の中で異ってパターン化されることを理解する。
2. 生徒は肉体的、社会的、個人的移行についての彼ら自身の経験をより深く理解することができる。彼らは自分自身の個人的成長や発達について分析的に思考し、個人の成長や発達の底に横たわる相異と普遍性を認識することによって他の人々と協調することを学ぶことができる。
3. 生徒は、肉体的成熟、愛情と忠誠、大人の身分への移行を、異った社会において異ってパターン化されている人間の普遍性として明らかにする。生徒はまた、アメリカの共同体内でのこれらの移行に関連した行動の個人的多様性についても調べる。
4. 生徒は、間個人的な関係と個人的な発達についてのより深い理解を獲得するために、ケーススタディメソッドを使用する能力を習得する。
5. 生徒は、生活周期におけるこれら4つの期間のダイナミックスを説明するさいに、いくつかの生物学的社会科学的見通しを適用することの有効性を学習する。
6. 生徒は、異ったそれぞれの社会によって保有されている文化的価値、そして子どもたちが経験している移行についての行動や情緒のパターンに影響を与える価値についての知識を獲得する」

(①, 40-41)

4. 単元4「社会における個人」

単元は、①共同体での生活、②アメリカの労働、③家族の中での生活、④新しい共同体の設計という4つのトピックによって構成されている。青年期についての学習では、家族や近隣、共同体を、社会的、政治的、階層的世界の問題と結びつけて取り扱うことがややおろそかに

なったので、ここでは、大人期の最も重要な活動である仕事、大人が一生にわたって働き労働することの意義とその具体的な方法の考察を通して大人の社会生活についての学習がおこなわれる。生徒は、「大人の生活において労働はどのような位置をしめているか、個人は与えられた労働の機会や条件からどのようにして大人の生活を建設することができるか、職業の選択は個人の社会的位置にどのようなちがいを生じさせるか」(⑧, 18)といった問題ととりくみ、主に社会学からの概念や方法を使用しながら、個人の生活における労働の役割とそれが社会構造によっていかに影響されるかを考察する。そして多くの社会において職業のちがいが生じる収入、権力、名声、満足度の分布状況を調査するなかで、生徒は大人の社会構成員となることの意味や社会における将来の自分の職業的役割について考えるための知識や技能を習得することが期待されている。

まず最初のトピックでは、集団の欲求と個人の目標との間には自由と安全、平等と特権、自治と代議制という基本的な矛盾、対立、選択、妥協の緊張関係が存在しているという考えが導入される。そしてこの個人と社会との間のジレンマの解消に大きな影響を与えているのがつぎの3つの要因である。つまり、「①人間の本性についてのその人の考え方(たとえば人間は本来的に善であるか悪であるか) ②その人の社会についての分析と意見(たとえば社会は墮落しているか恵み深いのか、それは人々を助けているか食いものにしているか) ③その人の個人的な価値(たとえばその人は社会のすべての人々の平等な機会を尊重するか少数者の特権を尊重するか)」(⑧, 18)である。生徒は、これら3つの要因が個人と社会のむすびつきに与える影響を分析するために『代償と報酬の分析』という学習活動に参加するよう求められる。

つぎのトピックでは、生徒は仕事とは何か、なぜ人々は働くのかという2つの問題を探究する。具体的な学習活動の概要は表2に示すとおりであるが、ここでは労働への4つの報酬である収入、権力、名声、仕事への満足感という視点から種々の労働者の労働観についてのインタビューを分析するなかで、生徒が仕事の性格とその報酬の関係について個人的な見通しを発展させることができるよう配慮されている。さらに生徒は、仕事の性格と報酬分配を変えるための方法について、アメリカ中西部の小さな会社であるコモ・カンパニーの2つの異なった利益集団の矛盾解決過程のゲームに参加するなかで、その具体的メカニズムを理解する機会が提供される。第3のトピックでは、現代のアメリカの7つの異なった家族への

インタビューを通して生徒が家族生活の中で大人として直面しなければならない問題についてリアルな見通しを発展させ、職業が家族の生活にどのような影響を与えるかについて深く理解することが期待されている。

単元のおわりであると同時に1年間のコースのおわりでもある最後の学習活動は、トピック4で提示される新しい共同体の設計である。生徒は、これまでの学習で獲得したすべての知識や技能、資料(人間の進化と適応についての資料、個人の心理的特性についての資料、社会組織のダイナミクスについての資料)を活用しながら、人口2,400人の共同体の理想的なあり方を設計するよう求められる。この練習問題ととりくむなかで生徒は、「社会設計者として彼らが社会を再構成するとき、人間についての生物的、心理的、社会的特性をどのように尊重すればよいかを実際のな形で理解すると同時に、ひとつの社会のある側面を再構成することは自動的に他の側面にも影響を与えること、したがってたえず具体的な変化の成り行きの全体をみわたしながら選択をおこなうことが重要であること」(①, 14-15)を理解することができるわけである。(⑧, 18-22参照)ここで生徒が習得することを期待されている事項はつぎのようなものである。

1. 生徒は、大人の行動は特別な社会制度の中の位置と個人的目標の間の相互作用であることを理解する。
2. 生徒は、すべての社会の大人の行動は、その社会の中で個人が入手する多様な自由選択の行為として成立していること、これらの自由選択に対処するさいの多様性が社会における不平等、不均衡を結果することを理解する。さらに生徒は、彼らの社会の不平等についての特別なパターンが、いかに彼らの行動や他の人々の行動に影響を与えるかについての理解を増大させる。
3. 生徒は経済的生産の組織、矛盾を解決するための政治的パターン、社会における家族の構造、そしてこれらの要素が相互作用する方法についての知識を獲得する。彼らは、合衆国におけるこれらの構成要素の特色が、最大の平等と最大の個人的な成功、職業上の昇進と家庭サービスといった個人が葛藤しなければならない対立的な目標を調和させるために機能していることを理解する。
4. 生徒は、コースの種々の部分で獲得した理論的見通しや知識を共同体の設計における問題解決プロジェクトに適用することによって、それらを統合することを学ぶ。
5. 生徒は、彼ら自身の価値および他の人々の価値

は、人間の本性についての彼らの個人的見解によって影響されることを学ぶ。

6. 生徒は、個人的な価値の相異は人々が他の人々とばつかりあわない自分独自の目標を設定することへと導くことを学ぶ。生徒は、両立しない目標の追求はしばしば人々のあいだに矛盾をひきおこすこと、そして矛盾の解決はそれ自身が行動に影響を与える妥協を含んでいることを理解する」
(①, 41-42)

IV. 結 語

これまでに見てきたように、教育開発センター (EDC) で作成された高校用社会科コース『人間の本性の探究』は、内容的には人間の本性の理解という点において生物学と社会諸科学の学問的成果を重ねあわせ、人間行動の起源と特色について、これまでの個別的な学問領域からだけでは究明することのできなかつた総合的で学際的な理解を習得させること、方法的には仮説の設定や観察、資料評価、一般法則の発展といった実証的で論理的な行動科学の学問的方法を確実に習得させていこうとするところに、従来のアメリカの社会科にもみられなかつたきわめて新鮮で独自の観点がみられる。もちろんわが国の教育状況は多くの点でアメリカとは異っているので、このような試みを直輸入的に教育実践の場にもちこむことには問題があるが、本コースは、昭和53年の学習指導要領の改訂で、高校に新しく設置された『現代社会』といくつかの類似点がみられ、『現代社会』の内容構成や学習方法のあり方を考えていく上で有効な示唆を含んでいると思われるので、その点について若干の考察を加えることにしたい。

本コースのひとつの特色は、『人間の本性の探究』というタイトルからも明らかな通り、社会的文化的生物的存在としての人間とは何か、自己とは何かという総合的な問題を、倫理学や哲学のように観念的思弁的ではなく、あくまでも自然科学や社会諸科学の経験的資料にもとづいて実証的合理的に探究させていこうとする点にある。新しくもつけられた『現代社会』においても、「現代社会に対する判断力の基礎と人間の生き方について自ら考える力を養う」(⑩, 38)という目標を達成するために、その内容は「現代社会についての認識にかかわるものと現代社会における人間の生き方にかかわるものとの2領域構成」(⑭, 43)とするとされており、いわば現代社会の政治や経済の学習による科学的合理的な社会認識と、人間の生き方についての倫理哲学的な学習による自己の在り方についての主体的な自覚を統一的に形成

することがねらわれているわけである。このような2大分野からなる『現代社会』にあつて、本コースにみられるような学習内容は、人間とは何かといったこれまでは倫理哲学のみがとりあつてきたような形而上学的テーマを、実証的合理的な科学的方法によって探究させるなかで、いわば科学的な社会認識と主体的な自己理解の橋わたしをする学習領域として効果的な役わりを果すことができるのではないだろうか。特に高校時代は、自分とは社会とは何か、自分はどうか生きていくべきかについて真剣に考え、自己の主体性を確立していく上で肉体的精神的の両面においてひとつの大きな転換期に直面する年代であり、その反面最近の高校生には、「社会事象を自分の問題として内面化することが困難であり、日常生活の中で起る事実を一つの展望をもって把握することが極端に弱まっている」(⑩, 16)といった指摘がみられる。その時期に、幼児期から少年期、青年期、大人期へと人間の成長過程にそつて生活の見通しを拡大しながら、思春期という特殊な年代が長い一生の社会生活の中でどのような意義と役割をもって位置づけられるかについて学習することは、社会の問題と自己の問題とを切りはなし考えがちな生徒にそれらを結びつける接点を与え、より充実した社会生活を築いていくための重要な手がかりを提供することができるのではないかと思われる。したがって一年間のコースというよりもむしろひとつの単元として、このような学習内容を設定することは意義があるであろう。

つぎに本コースの内容構成は、『現代社会』の中に文化人類学や社会心理学といった新しい社会諸科学の領域はいうにおよばず、生物学、生態学、自然人類学といった自然科学の学問的成果をも積極的に導入することの必要性を示唆している。本コースでは、人間行動の本性というような新しいテーマの追求は、個別の学問領域だけではとりあつかいきれないとして、生物学と社会諸科学の統合という大胆な課題を設定しているわけであるが、『現代社会』においても先に述べた2領域の他に、人間と環境、人口問題と資源エネルギー、科学技術の発達と現代の経済生活といった、人間と自然と社会との関係を全体的な視野からトータルにとらえるための学習が設定されることになっている。これらの新しい問題を学習する際にも当然、これまでの古い学問上の区画主義にとらわれていたのでは、現代社会が直面している基本問題の本質を十分に解明することはできないであろう。そして社会諸科学の新しい分野や自然科学の領域の学問的成果をとりいれる場合にも、ただ問題の現象面を表面的に説明するために部分的形式的にとりいれるのではなく、問

題の深層を奥深く追究し事象の本質を内奥から究明するための視点として、積極的かつ体系的に導入すべきである。本コースは、専門科学の理論や資料、方法をできるだけ忠実に導入することによって社会科の学習内容を非常に学問的水準の高いしかもわかりやすい内容として構成することに成功しており、『現代社会』においても、教育内容と専門諸科学の成果をより強く結びつけることによって、知的水準の高い総合的な学習内容を組織する必要があるように思われる。

つぎに、本コースでは、観察、インタビュー、資料の分析、記録の解釈、統計の読み取りといった具体的な資料収集の方法とそれにもとづいた仮説の設定からその批判的吟味、および一般法則の発展といった科学的探究の方法をできるだけ確実に丹念に生徒に習得させていくことに意識的な努力が払われている点が注目される。このような社会科学自然科学の初歩的な、しかしこれからの学習の基礎となっていく具体的な調査・探究方法の習得は、わが国の社会科では案外当然のこととされながらも実際には軽視されてしまっている領域ではないだろうか。『現代社会』でも「人間の尊重と科学的な探究の精神に基づいて社会と人間に関する基本的な問題についての理解を深め」（⑩、39）というように科学的精神の重要性が強調されているが、その具体的な方法が必ずしも明確とはいえず、EHNで述べられている科学的探究の理念と方法はひとつのよい参考例となるであろう。

また本コースの学習内容を興味あるものにしてもらうひとつの要因は、ここでは紙数の関係で十分な内容を掲載することができないが、表2の学習活動の展開過程に示されているように、たとえば単元4「社会の中の個人」トピック2「アメリカの労働」の学習では、アメリカの最先端の社会学者であるハリスとヤンケロビッチが大統領諮問委員会の委託を受けて作成した調査研究「若い人々の価値と期待」や、ベアトリス・ホワイティング博士の論文「労働と家族—比較文化的見通し」といった著名な学者や研究機関の調査を、学習内容を構成するさいの中心的な骨格として位置づけ、まずその内容と方法について生徒に十分な理解を獲得させた後、さらに「生徒は労働の意味と重要性についての彼ら自身の考えと著名な社会学者の見解との類似と相異について考察する」とあるように、ただそれを無批判的に生徒に受け入れさせるだけで終るのではなく、生徒自身が研究者がたどった調査過程を追体験的にたどりながら、自らの手で批判的に研究者の出した結論を吟味・検証するための学習場面が設定されている点である。このように、すぐれた専門科学の研究成果を積極的に学習内容の中に導入

すると同時に、その結論を生徒の自由な検討によって批判的に吟味させる中で、それをほんとうに生徒自身の身につけた見方考え方として深く吸収させ、さらにそれを生徒自身の力で一步でも発展させていくための努力をおこなわせるという方法は、科学的態度の本質を理解させる上できわめて効果的な方法であり、『現代社会』の学習内容および学習方法を組織していくさいにもきわめて有効であると思われる。

また本コースでは、科学的な探究技能や知識の習得を中心にしながらも、協力、感情移入、価値の究明といった学習活動がいくつか設定されており、社会的態度の形成や個人的人格の発展という面にも注意が払われている点が注目される。そして、EHNの最後の学習活動である「新しい共同体の設計」では、生徒がEHNで学習したすべての知識や技能を使いながら人間の本性や生徒の個人的な価値、生活目標を考えに入れて、彼らが住みたいと思う共同体のモデルを作成する活動が設定されている。これは、一年間を通して何を学習してきたかを個人と社会との関係に焦点をあてて総合・要約すると同時に、これまでに習得した知識を具体的な問題場面に応用してみるという、知識の実践場面での活用が提供されているわけである。ここには、知的探究の育成にかなりの重点をおきながらも、最後には社会的現実への知識の適用をおこなわせることによって、実践的な態度の形成をも含めた総合的な知識・理解と態度・能力の形成をおこなっていくとする新しい単元構成の原理がみられるように思われる。これは、素朴で表面的な結論をだすだけの形式的思考操作にとどまりがちであった従来の問題解決学習を、より厳密で合理的な科学的探究過程として再構成していくようとする試みであるともいえよう。問題解決学習のもつ総合的性格を生かしながら、その学習展開をよりきびしい知的探究過程として組織していくこと、つまり総合性と科学性の両面の尊重ということが新設『現代社会』における単元構成のひとつの課題であるとすれば、EHNにみられる内容構成の方法はそのさいのひとつの手がかりになるように思われる。なかでも、世界の諸地域の人々の生活や文化と日本の生活や文化とがどのようにつながっているか、現代の生活の中で文化はどのような役割を果しているかをとりあつかう小単元「人間生活における文化」や、現代の青年の心理的社会的問題についてとりあつかう小単元「青年と自己探究」のあり方を考えていく上で、多くの示唆を含んでいることができる。

<表2> 学 習 活 動 の 具 体 的 展 開

単元4 社会の中の個人 トピック2 アメリカの労働 (20時間)	
学習主題・資料	主 な 学 習 活 動 の 目 標
<p>構 成 概 念</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカでは労働は、大人の生活に秩序を与え主体性と自尊心を確立することによって、基本的な人間の欲求を満たすさいに決定的な役割を果たす。 ・何が労働を満足のものにするかについての個々人の意見はひじょうに多様であり、人々の労働の目的もひじょうに異っているので、この多様性は重要な含蓄をもっている。 ・収入、権力、名声、満足といった労働の報酬の分配は個人間で異っている。 ・個人は自分の労働の性格とその報酬を改善することができる。 ・生徒が自分の感じている労働の性格と労働の目的について考えることは、彼らが自分自身の職業についての諸条件の優先順位を明らかにし、彼らが将来の自分の生活の中でおこなうかもしれない転職の意味について考えることをたすける。 	
<p>1労働の意味 (2～3時間)</p> <p>資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハリスとヤンケロビッチの調査研究「若い人々の価値と期待」のコピー ・いく人かの異った仕事の人々または共同体で異った仕事についている人々をクラスにまねき労働観について話を聞く。 	<p>認知的発展</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒は小集団活動に参加することによって仕事についての自分自身の考えや感じを明らかにし、人々はなぜ働くのかを究明する。(知識の獲得) ・生徒は大統領諮問委員会からの報告の抜粋を読むことによって、社会学者がアメリカ人にとっての労働をどのように定義しその意義をどのように解釈するかについての知識を獲得する。(知識の獲得) ・生徒は個人的にまたはクラス全体で労働問題について調査することによって、自分自身の将来における仕事の役割についての価値と期待を明らかにする。(知識の獲得) ・生徒は労働の意味と重要性についての彼ら自身の考えと著名な社会学者の見解との類似と相異について考察する。(比較) ・生徒は将来の仕事の役割についてのクラスの価値と期待を、ハリスとヤンケロビッチの全国的な調査によって得られた結果と比較・対照する。(比較) <p>社会的個人的発展</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共同体で仕事をしている年長者といっしょにパネルディスカッションをすることによって、生徒は異った世代の人々の行為や思考や感情に対する注意深さと感受性を増大させることができる。(感情移入) <p>技能の発展</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒は両親や隣人に彼らの仕事についてそして仕事が毎日の生活の他の側面にどのような影響を与えるかについてインタビューすることによって、資料を収集する能力を増大させる。 ・生徒はインタビューの結果をクラスに提示することによって資料を組織し編集する能力を増大させる。
<p>2労働をしている人々 (2～3時間)</p> <p>資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・役割、役割の期待、役割の矛盾と緊張を紹介した「仕事について考える」の練習問題のコピー 	<p>認知的発達</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が毎日の生活の中で果している仕事上の種々の役割を究明し、可能な役割の例と役割矛盾の例について説明する。(解釈) ・生徒はインタビューの資料を読むことによって、個々人が労働および労働の役割についていっている個人的な考えについての知識を獲得する。(知識の獲得) ・生徒はインタビューをした人々にとって仕事をよくするまたは悪くするいくつかの要因を決定する。生徒は、これらの個人がもし機会にめぐまれたならば彼らの仕事の役割をどのように再設計するかを予測する。(補足) ・生徒はどの特性が彼らの新しい共同体にくみこまれるべきかを決定するために、4つの共同体における労働の特色を比較・対照する。(分析)

学習主題・資料	主な学習活動の目標
<p>・ベアトリス・ホワイトティングによる研究「労働と家族—比較文化的見通し」のコピー</p>	<p>・ベアトリス・ホワイトティング博士の論文を読むことによって生徒は、社会学者が婦人の労働役割に対する技術革新の影響を決定するために、比較文化的資料をどのように使用するかについての知識を獲得する。(知識の獲得)</p> <p style="text-align: center;">社会的個人的発展</p> <p>・生徒はインタビューの資料について読み討議することによって他の人々の考えや感情についての注意深さを獲得する。(感情移入)</p> <p>・生徒は小集団で学習することによって、協力しながら個々人の異った労働と生活についての知識を共有する。(協力)</p>
<p>3 労働の報酬 (4 時間)</p> <p>資料</p> <p>・「職業の評価：収入、権力、名声、満足」の一覧表</p> <p>・ジョン・ローウェルの公正さについての理論</p>	<p style="text-align: center;">認知的発達</p> <p>・生徒は収入、権力、名声、満足という4つの基準にもとづいて13の職業的役割をランクづける。(評価)</p> <p>・生徒は合衆国における4つの労働報酬(収入、権力、名声、満足)の配分についての知識を獲得する。生徒は労働の役割を階層的に組織することの長所と短所についての知識を獲得する。生徒はある社会学者が考えている職業上の名声のちがいを決定する要因についての知識を獲得する。(知識の獲得)</p> <p>・生徒は「労働している人々」でインタビューした人々がこれらの職業上の役割の相異によってどのような影響を受けているかを明らかにするために、労働報酬の配分における不平等についての彼らの知識を活用する。(補足)</p> <p>・生徒は、その社会にすんでいる人々がどのような役割の仕事でも進んですることができるようになるような方法で4つの労働報酬を再配分する。(感情移入)</p> <p>・生徒は人間の本性についての理解にもとづいて、新しい共同体の中で仕事を獲得するための2つの方法の有効性について評価する。(評価)</p> <p style="text-align: center;">技能の発展</p> <p>・生徒は図やグラフを解釈する能力を習得しさらに発展させる。(図表とグラフの読解)</p>

(注) 本表はトピック2アメリカの労働(20時間)のうちの前半10時間分を掲載したものである。(⑧, 6-9)

引用文献

- ① *Exploring Human Nature: An Overview of the Course and Goals and How to Assess Them*, Education Development Center, 1974
- ② George W. Goethals, *Exploring Human Nature—Sources for Teachers*, Education Development Center, 1974
- ③ *Exploring Human Nature: Workshops for Teachers—From Many Perspectives*, Education Development Center, 1974
- ④ *Exploring Human Nature—Anthology of Cultures and Communities*, Education Development Center, 1974
- ⑤ *Exploring Human Nature Unit 1: Origins of Human Behavior—Teacher's Guide*, Education Development Center, 1975
- ⑥ *Exploring Human Nature Unit 2: Childhood and the Community—Teacher's Guide*, Education Development Center, 1975
- ⑦ *Exploring Human Nature Unit 3: Coming of Age—Managing Transitions—Teacher's Guide*, Education Development Center, 1975
- ⑧ *Exploring Human Nature Unit 4: The Individual in Society—Teacher's Guide*, Education Development Center, 1975
- ⑨ J. S. ブルーナー著 田浦武雄・水越敏行訳『教授理論の建設』黎明書房 1966年
- ⑩ 板倉聖宣著『科学と方法』季節社 1969年
- ⑪ 麻生ゼミ「社会科カリキュラムと社会認識の形成」大阪大学人間科学部教育社会学研究室『大阪大学教育社会学研究集録第1号』1980年
- ⑫ 元木健著『人間の学習としての社会科』明治図書 1976年
- ⑬ 佐藤照雄・星村平和他編『高等学校学習指導要領の展開—社会科編』明治図書 1978年
- ⑭ 星村平和「現代社会の新設をめぐって」日本社会科教育研究会『社会科教育論叢』第XXVI集 1979年
- ⑮ 黒沢英典「高等学校社会科『現代社会』の課題」日本社会科教育研究会『社会科研究』第27号 1979年